

キリスト道講演会

聖書に親しむ

2006年10月22日(東京法曹会館)

奥田昌道

なぜ日本人にとって聖書が遠いのか 天国の告白 福音書はイエス・キリストのドラマ 私たちは使徒たちと同窓生 サマリヤ人 サマリヤの女との対話 永遠の命に至る水 霊と真理をもって父を拝する時が来る いずこにありても、いついかなるときも 聖霊を一人びとりにください 見えるイエスの奥に見えない霊的人格が 一對一の対話 キリストとじかじかに出会う 霊が止まる存在が霊止 文語訳と新共同訳の聖書 命懸けで神の言をくわって生きる キリストによって新しい生命をいただいた 与えたくて仕方がないお方 本当の健やかな生き方 キリストに出会った人々 弟子の足を洗う イエスの弟子であるならば わたしの内におられる父 愛によって結ばれている関係 まことのぶどうの木 ゼロになれない人間 我々が受くべき業に対する審判 毎日読む聖書 キリストによって人間が救われていること 祈り

なぜ日本人にとって聖書が遠いのか

今日のテーマは「聖書に親しむ」という題にさせていただきました。なぜ、そういう題を選んだか。

どうも日本人にとって聖書という本が遠いんですね。キリストという方も遠い。それが何故なぜなのだろうかと思っただけです。

たとえば、日本人は万葉集なんかが好きです。論語なんかも好きです。それから般若心経なんかもたくさんの方がお読みになったり、愛誦なさったりします。あるいは、源氏物語もそうかもしれない。そういういろんな古今東西の作品に日本人は心を開くけれども、なぜか聖書というと、「これはちよつと」ということで、非常に距離があるように思えてならない。それはなぜなのだろうか。こちらの側に問題があるのか、聖書の側に問題があるのか。キリスト教という宗教に問題があるのか。それを伝えようとするキリスト教の組織とか宣教師、伝道者あるいは牧師、そういった方々に問題があるのか、どこに問題があるのかというのを常々、私は考えています。

日本人ということ、これは私は決して自分から離れることはありません。決して、コスモポリタンとか、インターナショナルというのではなくて、私はまぎれもない日本人の一人である。それぞれの方が、韓国人であれ、中国人であれ、アメリカ人であれ、それぞれ自分の民族に対して誇りをもつことは当然のことです。私は決して国粹主義者ではありませんけれども、自分の民族というもの、あるいは自分の生まれ育った所に対する愛着というものがありながら、それでいて、私は猛烈にキリストに惹かれています。

本当にイエス・キリストという方は、私にとって唯一の、無条件に帰依きえし信頼し、その方にお委ねすることのできるお方です。地上での私の恩師は、信仰の上では小池辰雄という先生であり、ま

た学問の上では、京都大学におられた民法の先生であり、その他いろんな面で自分の尊敬すべき方がいらつしやるけれども、「唯一の主は誰か」と問われたら、「イエス・キリスト」と答えます。

「唯一の救い主は誰か」と問われたら、「イエス・キリスト」です。このイエス・キリストという霊的人格というのは本当に凄いんです。その方を私のような在野の人間が——教会の牧師でも何でもありません。神学校を出たわけでもない。キリスト教学を修めたわけでもない。れっきとした法律学者として歩んできた——そういう人間が、なぜそこまでキリストにのめりこむのか。もちろん、小池辰雄という先生のお導きがあった。その方が道を示してくれたけれども、それによって、なぜイエス・キリストにそこまでめりこんでしまったのか。逆に言いますと、なぜ日本人にとってイエス・キリストが遠いのか、聖書が遠いのかということなんです。

天国の告白

私は今日は昼前に竹橋のホテルを11時にチェックアウトして、11時半くらいにブラブラと外を歩きたからこちらへやって来ました。日曜日は歩行者天国で、皇居の周辺の道は車を通さない。競輪の自転車に乗っている人とか、子どもさんたちが自転車で大通りを走っている。それから皇居の周りの道をランナーが走っている。そこは私もいつも走っている所ですけれども。実にのどかな風景です。そこをブラブラと歩いて来た。実に美しいですね。自然が素晴らしい。太陽が素晴らしい。静かですよ。そういう自然の中を歩きながら、私はしみじみと思った。きっとイエス・キリストが

お語りになった情景もこういう所ではなかっただろうかと。あのガリラヤ湖のほとりで、丘に上ってそこに座して、周りをとり囲んだ群衆に語られたという、いわゆる「山上の垂訓」というのがあります。あれはなにも山上の垂訓という堅苦しいものではなくて、本当に自分たちの、自分の周りに集まってきた弟子およびその周りの人たちに対して、

「天国とはこういうところだよ。今、地上は惨憺たる姿だ。苦しみ、悲しみ、悩みが絶えない。しかし、天国はこういうところだよ」

ということを告白された、そういう場面だと思うんです。大体、イエス・キリストという方にとつては、大空のもとで旅をしながら、出会う人ごとに神の国のことを伝えていらつしやった。

「空の鳥には罅がある。狐には穴がある。しかし、人の子は枕する所なし」

と言われたように、本当にさすらいの人であられました。何人かの人たちがイエス・キリストの身の回りのお世話をしましたけれども、決して定住の場所もない。大空が自分の屋根であり、大自然が自分の休らうところである。大自然の奥に、「父の懐」に、神さまという方の懐にいつも休らっておられた。そういうお方でした。そういう方が語られた福音というものは、神の国の音信というものは、決してある一定の場所に閉じ込めておくようなものではなかったはずなんです。

ところが、だんだん教会制度というものが固まってきましたと、何かひとつの宗教体系に変わってきたように思う。やはり、宗教というものはひとつの組織を持ち、教義を持ち——言い伝えといましようか——そういういたものを持たないと、次の世代に伝えられていきませんから、それはある

意味ではやむをえないけれども、今度はなにかそれがすべてになってしまつて、本当の中身、本当の生命があつた時代のようになり生き生きと生きていくだろうかということになるわけです。それが枯渇しますと、宗教改革という運動が起こります。大事なのは、外側や建物、宗教体系ではなくて、生命そのものである。この生命そのものが、どの場所であろうと、どんな所にも語られ、根付き、息づき、命していく。そういうものであるはずです。

福音書はイエス・キリストのドラマ

私はずっと歩いていきますと、皇居の周りの松の緑が素晴らしい。この松は何年の生命があるのだろうか。松は地中から養分を吸い上げていくけれども、この松の生命は一体、何年という限定があるのだろうか。見てみると、何だか永遠に緑していくような感じがしてならない。その生命というのは何だろうかと思つて見ていた。

ひるがえつて、私たちの生命というのは、そういう松の生命に比べて実に儂い。長くて百年。二百年までいけば最高かも知りません。そういう私たちの自然の生命、寿命はそれですべてなのかと。決してそうではない。そうでなくて、キリストは、

「百年、二百年の自然の生命を越えて、永遠なるものがある。私は実はそれを伝えにやつて来たんだよ」

と。天のところにはいらつしやつた霊なるキリストがわざわざ天界からくだつてきた。マリアさんに

宿つて、肉体をもつてこの地上に生きられた。そして、その方はたえず天を慕つておられた。「父よ」といつも祈つておられた。私たちは、「父よ」なんていう祈りはできない。その方にとつては、その「父」と呼びになつたお方の御意だけがすべてなんです。その御意に従つて歩くことがそのお方の生命だった。それ以外に何もできない。他のことをやれと言つたつて無理ですと。

いろんな言葉や業わざがありました。病める人々をたくさん癒いされたり、時には死人をも甦よみがえらせたりとか、いろんな不思議なことをなさつたけれども、その方ご自身の自覚としては、

「自分では何もしていません」
と仰つた。ヨハネ伝に書いてあります。

「自分から何もしていません。自分から何も言えない。言葉でさえ、それは父の御業みわざである。

私の中で父が行つておられる父の御業である。私は何者でもない、本当に自分はナッシングだ」

ということに徹しておられた。だから、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と言われた。神さまの前に自分の心を本当に開け広げて、何ひとつ己のものがない。そこに神さまというオール、全、すべてが宿つた。無限無量が宿つた。そこからいろんなものが流れていく。それが愛となつて流れていきますから、病める人々に手をおけば癒いえてしまう。死人に「起きよ！」と言えは起き上がつてくるという不思議なわざが出てくる。その記録が新約聖書です。

私は、新約聖書というのは決して新聞記者が書いたような記録だと思っていない。いろんな資料から弟子たちが印象に残ったことを、ある種の意図をもってそれを再構成して組み立てているひとつのドラマだと思っています。それぞれがドラマなんですね。マルコ、マタイ、ルカそしてヨハネ。みなそれぞれに、ある意図をもってキリストに関わる音信、物語、その言葉、そのなされた事柄、事跡、そういったものを組み立てて、こうだったということを書いている。

「では、真実性はないの?」

と皆さんは仰るかもしれないけれども、私たちはドラマにいくらでも涙を流すわけですね。全然、実話でなくても、そこに心をうつものがあれば、我々は涙を流し感動する。イエス・キリストという本当の實在の方をめぐるいろんな——あるいは伝説的なものがあるかもしれない、言い伝えがあるかもしれない、伝承とか——そういったものをベースにしながら、イエス・キリストに関わる音信を立体的に組み立てて、そこにイエス・キリストの言葉が散りばめられ、なされた御業が出てくる。また、敵対する者たちとの激しい戦いもある。そういうドラマが福音書です。

そして最後は十字架というところで終わる。しかし、十字架で終わりっぱなしではない。その方は霊体となって現れてきた。神さまの御意を100%に行った人がそのまま墓に眠りっぱなしなんて、こんな不合理なことは絶対ありえない。現れてくる。そして、今度は天界から弟子たちに聖霊をくだす。その聖霊を受けた弟子たちがまるでキリストが乗り移ったように、あちらこちらに伝道をして行った。使徒行伝、使徒言行録というのに記されています。そのあとにパウロが改心するわけです。

私たちは使徒たちと同窓生

あの時代のドラマというものが、私にとってはものすごくリアルなものとして自分の中に甦ってくる。私は皆さんにこの聖書を自分のひとつの愛読書、あるいは生命の洗濯をさせてくれるものとして——只です、受信料も何もいりません。本当に只ですから——それを自分で心の中で再現していただいて、その中に入っていたら、いつしか、

「ああ、自分もあのペテロやヨハネやパウロなんかと同じ世界に住んでいるな」

と感じてほしい。たかが二千年しかたつてないんですよ。地球の歴史というのはもの凄く永いものでしょ。そんな千年や二千年というのは大したことではない。同時代的、同質的にそこに生きる。

私は、弟子たちは第一期生だと思っている。キリストの第一期生がヨハネ、ペテロ、ヤコブだとかいうあの十二使徒たちです。それから後から遅れて参加したのがパウロです。これは敵対勢力だったけれども、キリストにひっくり返されて、本当にキリストのために生命を捨てた。これが異邦人伝道をやったパウロです。

こういう人たちを第一期生としますと、私たちは第何期生かしらないけれど、同窓生なんですよ。ところが、ここは日本です、大和です。でも、太陽の光というのは昔からずっと照らし続けている。太陽の光は昔からこの地球を照らし続けている。アブラハムのときも、このイエスのときにも、そして今に至るまで照らし続けている。そのように、霊界の太陽であるキリストは——見えませんが、見えませんが——霊的な実在者としてのキリストという太陽の光は世界中を照らし続けている。

世界中を照らして、民族的な差別とか、お前さんのところは仏教国だからダメだとか、そんなことは絶対に仰らない。

ヨハネ伝第一章の始めのところに、

「もろもろの人を照らす真の光があつて、世に來た。しかし、世はそれを悟らなかつた」と書いてあります。

「闇の中に光は輝いている」

と書いてある。本当にキリストという方は一切を包み、一切を生かす方です。仏教はダメだとか、儒教はダメだとか、そんなことは仰らない。全部を包んで、それを全き姿に変貌させていく。決して排他主義ではない。これだけはダメだとか、決して排他的ではない。全部包みこんで生かしてしまふ。変質変貌させていく。そして、どの時代も、どの人も現在なんです。現在、語りかけてくる。つかみかかってくる。現在、今、語りかけ、つかみかかってくるその出会い、これに触れて火花した人はその時に変わってしまうんです。

サマリア人

その物語が今、読んでいただいたサマリアの女との対話というところに出てくるものですから、私はこれをひとつのサンプルに選びました。これは実に愉快な物語です。大体、サマリア人はユダヤ人と交際していなかったと書いてあります。これは元は同じアブラハムの子孫です。元は同じ出

なだけけれども、このサマリア人は、地図で見ますと、ちょうどナザレのある北のガリラヤと、エルサレムのある南のユダヤの中間にあります。これがその土地の異邦の民と婚姻して混血になつてしまつた。イスラエルというのは非常に純血を守りますから、他の民族と交わつてはいけない、婚姻してはいけないという。

なぜかといいますと、そのどの民族も神さまを持っています。多くの場合、偶像神を持っている。そういう偶像神に心を寄せて、「ヤハウエー」と呼んだあの神さまに対しての純粹な忠誠が破られる。「宗教的姦淫」という言葉でよばれています。それは絶対にダメなんです。

モーセの十戒の第一番目に、

「私以外の何ものも神としてはならない」とあります。これは「ならない」ではなくて、

「お前たちにとつては私以外の神なんかあろうはずがない。そうだろ。一対一だろ」ということです。こういう一対一の信愛関係だつたんです。しかも、

「いかなる形も造つてはならない。靈なる神は靈なる神として拝め」

というんですから、これは昔の人にとつてはとても難しい要求だと思えます。何か形を造りたい。建物も欲しい。祭壇も欲しい。すべて自分でコントロールできそうなものが欲しいのが人間性なんですけれども、イスラエルの神さまは「絶対に造るな」と言う。それから、

「みだりにわが名を呼ぶな」

と仰る。気安く呼ぶなど。だから、彼らは「ヤハウエー」と呼んだら畏れおおいというので、「アドナイ」(わが主)と呼んだ。そして、「ヤハウエー」という名前を忘れてしまつて、もう一度復元するときに、何か母音と子音のつけまちがいで、「エホバ」という名前ができたということ。だから、「エホバ」という名前は、「ヤハウエー」という「実存神」、神中の神、「有りて在るもの」、永遠に在したもう方、しかも、在りつつ他者をあらしめる、生命づけるという「ヤハウエー」という名前なんです。「実存神」です。それと「わが主」と、この二つが付いて「エホバ」という。それで小池辰雄はそれを「実存主」——実存神にして主なる方——と言つて、

「エホバという名前はなかなかいい名前だよ」ということを仰いました。

そういう神さまです。ところが、このサマリアの人たちは周りの異民族と婚姻してしまつて、いわば宗教的な純血をけがしたというわけです。だから、イスラエルから排除された。イスラエル人は絶対に交際しない、口もきかない。ところが、イエスという方は全然そういうことにこだわっていない。

まあ、福音書をみてごらん下さい。ルカ伝でもそうです。大体、褒められているのはサマリア人なんです。ユダヤ人はダメなんです。ユダヤ人というのは「パリサイ人」とか「サドカイ人」とかいますけれども。パリサイ人というのは律法に凝り固まつて他を審く。己を高しとする。

「自分たちは律法を守っている。あいつらはダメだ」

と、他を退けさげすむ。そういう傲慢の霊にとりつかれているような存在です。

サドカイ人というのは、

「霊なんかあるものか」

と言っている知性派なんです。ところが、イエス・キリストはそのユダヤ人の律法主義者とかそういう者たちから異端視されます。それでいつも、サマリア人に対してはものすごく温かい目で見ている。「良きサマリア人」の話というのがありますね。あれもそうです。

また、「十人の癩病人」の話もあります。十人の癩病を患っていた人がイエス・キリストのところへやってきて、「助けてください」と言ったら、イエスは何もなさならいで、

「さあ、今から祭司のところへ行つて、身体を見せなさい」

と言われた。身体を見せて、きちんと治つて癒えているという証明書をもらったら、自分たちの仲間に戻つていける。それまで隔離されているんですね、癩病というのは。だから、「さあ、行つて、祭司に身体を見せなさい」と。それで、十人が行く道すがら癒された。そうすると、たった一人がすぐ引き返して、神を讃えながらイエスのところへ帰ってきたというお話があります。それがサマリア人であった。イエスは言われた、

「十人潔められたはずではないか。しかし、十人のうち神を讃えて帰ってきたのはあなた一人なのか。サマリア人のあなただけなのか」

と言われた記事が出てきます。そのように非常にサマリアという、ユダヤ人からは排斥されている

ものに対して、イエスはものすごく温かい目で見ている。それは民族で見えていない。心を、人らしい人を見ている。宗教の故にゆがんでしまっているユダヤのあり方をキリストは排斥して、本当の人間性を回復して、「人間らしい人間であれよ」と。これがイエスの心だったと思うんです。それが今日のヨハネ伝4章の「サマリアの女との対話」の中に出てまいりますので、それを皆さんと共に味わいたいと思います。

サマリアの女との対話

「さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、――洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである――ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

地図を見ますと、ユダヤは南の方で、しかも山岳地帯です。それに対してガリラヤというのは、のどかな田園地帯で緑豊かな場所です。そのナザレでイエスは育たれた。ガリラヤ地方にたびたびいらっしやった。そして時々エルサレムの方へもおいでになった。このお話はエルサレムのあるユダヤの方からガリラヤへ戻ろうとなさったその途中の旅の出来事です。多分、お天気がよくて暑かったんでしょね。夏の真昼時と想っていたきたい。

⁴しかし、サマリアを通らねばならなかった。⁵それで、ヤコブがその子ヨセフに与え

た土地の近くにある、シカルというサマリアの町に來られた。⁶そこにはヤコブの井戸があった。」(ヨハネ4:1-4)

イスラエルの人たちにとつては、井戸というのはものすごく大事なことです。井戸をめぐる争いもしばしば起こります。水をめぐる争いです。

ヤコブも実は、長い話になりますけれども、創世記をお読みになったら出てきますが、エサウと喧嘩して――エサウは長男なのに弟のヤコブは長男の権利を奪い取ってしまった、それで恨まれて殺されそうになるので――北の故郷へと旅立っていく。そして、故郷へ来た時に井戸ばたで水を汲んで家畜に与えたりして助けてやる。水汲みにきた女の子の中にラケルという女性がいて、それが彼の奥さんになる。そういう、井戸をめぐるロマンスが展開するわけです。

これはそこの話ではなくて、ヤコブが自分の愛する子供のヨセフに与えた土地の近くにそういう井戸がある。シカルというサマリアの地にヤコブの井戸がある。このヤコブの井戸というのは素晴らしい井戸のようですね。深い井戸で、その地方の人たちはこの水を汲んで、ずっと長年生活をしてきたという由緒ある井戸のようです。その井戸のそばにイエスも旅に疲れてやって来た。神の子は疲れないかという、決してそうではない。やはり彼も人の子ですから、お疲れになった。

「イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ころのことである。

⁷サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。

⁸弟子たちは食べ物を買ったために町に行っていた。すると、サマリアの女は、「ユダ

ヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。

ここからイエスの本領発揮ですよ。私は関西人ですので、関西弁で言うと、

「ねえ、あなた、そうおっしゃるけれどさ、わたしって誰か知ってる？ あんたがもし神さまの賜物というものを知っていたら、あんたの方から、それを欲しいときっと願いでるんだよ。わたしの正体がわかるかい？」

と、こう聞かれたわけですね。

永遠の命に至る水

¹⁰ イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、

この私がどんな存在か、それを知っていたら、あなたの方から飲ましてほしいと頼むはずだよと。

あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

自分は生きた水を、あるいは命の水を与えたことであろうと。そこで、

「女は言った、「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。』¹² あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家

畜も、この井戸から水を飲んだのです。」

「主よ」というのは「だんなさま」というぐらいでしょうね。

「あなたは一体、汲む物も持っていないではありませんか。この井戸は深いですよ。どこからその命の水を、生きた水を手にお入れになるおつもりですか。聞きますけどね、私の先祖のヤコブというのは偉い人なんですよ。ヤコブもこの井戸から飲んだ。その子々孫々にいたるまでこの井戸から飲んだ。それで私たちは今日まできている。あなたは一体何者なの？」

と、こういう感じはこの女は言った。非常に正直でしょ。この女の誇り高いというか、胸をはって「ヤコブはねえ」と言っているのが目にみえるようです。「わたしたちの父ヤコブ」と言ってます。何もお父さんでも何でもない先祖の人なのに。しかも、血筋もつながっているかどうかもわからないけれど、いつのまにかヤコブを「父」なんて呼んでます。

¹³ イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。』しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

びつくりするようなことを聞いたものですから、この女性は、

「えっ？ 決して渇かない？ その人の中から水が湧き出る？ 永遠の命に至る水が湧き出るとは何のことだろう？」とにかく、水を汲まなくてもいいそうだ」

と。毎日毎日、水を汲みに来なければならぬこの労働が大変な重労働なんです。女の人のとっては、これは助かるわと思っただけでしょうね。だから、

¹⁵女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください。」

「これはダメだわ」とイエスは思われたわけです。「話にならない。だんなを、夫を呼んで来なさい」と。

¹⁶イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、¹⁷女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。¹⁸あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」

「あつ、そうだよ。あなたはかつて五人の夫がいたけれど、みんな別れてしまって、そして今一緒に暮らしているのも正式の婚姻をしていない。そうだよ。」

と言われた。そしたら、その女の人はもうたちまち態度が変わりました。「あなたは預言者です。私の過去を言い当てた」と。

霊と真理をもって父を拝する時が来る

¹⁹女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。²⁰わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべきは場所はエルサレムにあると言っ

ています。²¹イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。²²あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。²³しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。」

「霊と真理」というところは文語訳では「霊と真」と書かれている。私は「霊と真」の方が好きですね。つまり、全存在をかたむけて——誠心誠意といえますか——全存在をかたむけてそのお方を拝する。そういうときが来るんだと言っ。

今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

²⁴神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。²⁵」(ヨハネ4:6-24)

これは本当に私は素晴らしいことだと思つてます。宗教というのは特定の場所を指定いたします。特定の神殿、教会、エルサレム本山に巡礼の旅をしたりする。けれども、イエスが言っておられることは、そういう所はひとつの手段としての意味はあるだろう。そこへ行けば、心は何か清くなつて、礼拝するのが普通かもしれない。けれども、それは本質的なことではない。神さまは宇宙の神さまだ。天地万物を創造なさった神さまは霊なるお方である。霊なるお方は、人が造った宮にお住みになるようなお方ではない。そこを宮だというから、仕方なしにそこにおいでくださるけれども、本当は

宇宙を住まいとなさっているお方だ。そのお方は霊なるお方であるから、しかも、あなた方一人ひとりには霊的存在だから、霊と霊が結び合う、火花する、そういう向かい方、これは場所の限定がない。時の限定もない。今どこでも即座にという。これが本当に神さまが求めておられることだと言う。

正に革命的宣言ですね。私はここが大好きなんです。それぞれがそれなりの意味をもちます。意味はもちますけれども、そこにこだわってはダメです。こだわってそこが絶対だというふうに絶対化する、宗教戦争が起こります。そうではない。それらはそれなりの意味を、相対的な意味をもつけけれども、それにこだわらないで、常にそこを破って宇宙空間に旅立っていく。

そこは天空のもとのです。神さまを大声で讃美する。本当に大声で、

「主よ、御名を讃えます！」

と、はらわたの底から言えばいい。

「神さま、ありがとう！」

と。それでいい。子どもなら、「お父ちゃん、ありがとう」でもいい。何でもいいんですよ。はらわたの底から讃美します。感謝します。「ありがとう」だけです。「何となれば、あなたがいらっしやらなければ、私は生きてられないからです」と。

いずこにありても、いついかなるときも

私という人間というのは、顧みたら、百年の命しかありません。それも百年を保証されているわ

けではありません。明日ひょっこりいなくなるかもしれません。私ももう74歳になりましたのでね、やはり早く遺言を書かないといかん(笑)と思っっているけれども。自分を顧みれば、百年生きるなんていう保証はどこにもない。明日何が起こつても不思議でない。

しかしながら、この命をいただいているあいだ、毎日生き生きと感謝して、命にあふれて生きたい。地上の命の終りが決して私の生命の終りではない。本当の生命、キリストと同じようなこの素晴らしい霊をいただいて——霊のからだ、キリストの復活体です——霊の体をいただいで永遠に生き続ける。キリストが待っていてくださる。パウロたちもみんな待っていてくれる。そういう世界が用意されているんです。

そういう者たちが礼拝する場所というのは特定の場所でもなければ、特定の時でもない。それは人間ですから、日曜日——今でも聖なる日、「聖日」と呼んでいます。ユダヤ人は土曜日が「安息日」で、この日は労働してはならないとされている——律法化されてしまいました。本当は安息日というのは、人間の業を休んで、ただ神さまの恵みだけに生きるといふ日です。六日間は一生涯懸命に自分の糧を求めて精いっぱい働いています。働かざる者食うべからずで、本当に大変ですよ。でも、

「安息日だけは安心して神の懐ふところに憩え。神が養いたもうから」

という、それが安息日だったんです。人が安息日のためにあるのではなくて、安息日は人のためにある。キリストは、

「安息日に人は家畜を連れ出して水を飲ませてやるだろう。だから、安息日に病んでいる

人や苦しんでいる人を祈りをもって癒して何が悪いか。神は今にいたるまで働きたもう」

と言われた。その神の働き、愛のお働き、生命を与えるお働き、それを受け入れるのが人の役目だと。ウィークデイは、神さまを放っておいてガツガツガツ働いている。けれども、七日目はすべての業を休んで神さまの懐に休らいなさいと。これが本当の安息日です。

ところが、「安息日は働いてはならない」という法律にしてみました。そして、働いているかどうかたえず監視している者がいた。「何マイル以上は歩いてはダメだ」とか、「麦の穂をつむのはダメだ」とか。そんなことになっていったときに、イエス・キリストがそれを破られたわけです。

それから今度は、クリスチャンたちは、日曜日は主が甦られた日だと言って——キリストは金曜日に十字架につけられ、日曜日の朝に復活した。あれは死体が生き返ったのではなくて、本当に靈化されて霊体となって現れてきた——それを記念して日曜ごとに礼拝をするようになった。これを「聖日」聖なる日と呼んでいる。でも、この聖日もまたいつのまにか律法化されて、聖日に何かしたら罪なんだろうとか、聖日に教会へ行かなかつたらやましいのだろうとか——まあ、行くにこしたことはありませんけれども——あまりそれにとらわれてほしくない。やはり、

「いずこにあっても、いついかなるときも」

という、このヨハネ伝の精神です。神はいずこにあっても、むしろ誰にでもそばに来てくださる。我々がどこかへ行つて礼拝するのではない。向こうの方からおりてきて、

「お前と一緒にいて離れないよ」

と言われる。これがキリストの福音なんです。大体、神さまというのは上から降ってくる神さまなんです。くだらない神さまはくだらないねという(笑)。本当にくだってくる神さまなんです。

モーセにもそうでしたよ。向こうから語りかけてきて、

「モーセよ、モーセよ。お前をつかわすから、エジプトで苦しんでいるイスラエルの民を助けよ」

と言つて、たえず向こうから迫ってくる。モーセは、

「いやあ、勘弁してください。私は何もできません」

「ダメ、ダメ、ダメ。お前を使うから」

と言つて無理やりにつかわす。そういう働きかけてくる神さまです。キリストもそうなんです。キリストというお方は我々と神さまの間を隔てている隔てを全部とりはらつて、

「安心しろ。この霊と真とをもつて礼拝することを安心して行えるように、私は全部そなえをするから。私はお前のところへ降ってくる」

と言われる。

聖霊を一人びとりにください

事実、キリストは天界へ昇られてから、あのペンテコステという五旬節のときに聖霊をくださったもうた。火のごとく降ってきた。あれがキリスト教会が生まれた記念日なんです。火の如く聖霊が

降ってきた。キリストの霊、「助け主」です。この新共同訳では「弁護者」と書いてあるが、私はあまり好きではない。「助け主」でいい。「慰め主」、それがキリストの霊です。私から言うと、キリストの分霊です。キリストという霊的な実在者が自分の分身としての聖霊を一人ひとりにくだす。このお方が宿られるならば、もう天地の間にパイプができてしまう。パイプが、きずなが結ばれる。その聖霊という方がたえず私たちを祈らせてくださる。祈りの霊ですよ、聖霊というのは。無条件にその方が私たちのところに来てくださるんです。

それがこのヨハネ伝のここに言われていることが成就している姿です。霊と真をもつて拝する。時と所は問わない。時代も問題ではない。だから、そういうふうには私は日本の方々にこの聖書を受けとってほしいんです。先入観を捨て去って受けとってほしい。

「いや、あれは奥田流ではないか」

と言われてもかまいません。私はキリストのためなら際はりつけにされても結構だと思つてますのでね。本当にキリストは呻うめいておられると思う。

「なんでこの私の愛を知ってくれないのか。私のこの熱い思いをどうして受けとってくれないのか。日本人よ、あなた方は他の文化は全部吸収する。うまく利用して自分のものに仕上げる。すぐ加工は上手だ。ところが、なぜ、私自身だけを拒絶しているのか。私はお前たちのところに住みたい」

と。日本は八百万やおよぼすの神々に礼拝した。仏教も伝来した。それから、いろいろなものが入ってきて、

それを全部日本的に加工して日本文化の源にした。けれども、キリストだけは敬遠してしまつた。もう残念でしかたがない。きつと天界で歎いておられると私は思っているんです。

そのように礼拝のことを言われた。そして、この女の人は何と言つたか。

「25女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。

「メシア」というのは「油そそがれたる者」「救い主」ということです。「キリスト」というのが大体、「油そそがれたる者」という呼び名ですから。

その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」

天地宇宙のこと、神さまの世界のことを全部話してくださるはずですよ。この女はよく知っていますよ。26イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

遠いところに求めるのではなくて、今こうやって話してはいませんか。すると、この女はびっくりして、水を汲みにきたのにその水がめを置いて、パッと町へ走つて行つた。イエスも、「おつ、水がめを」と言われなかった。僕はこういうところが大好きです。

見えるイエスの奥に見えない霊的人格

27ちよつとそのとき、弟子たちが帰つて来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言つる者はいなかった。28女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言つた。

²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」

五人の夫がいたとか、そういう身の上を全部当てられた。だから、来てくださいよ。ひよっとしたら、この方がメシアかもしれないと。これはけしからんですよ、「私はそれなり」とキリストは言っておられるのに。「ひよっとしたら、この人がメシアかもしれませんよ」と、割引して言いました。

³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

ここが素晴らしいですね。このサマリアの女がどういう身持ちの人かできません。五人も夫がいて、今は別の人と住んでいるんだから、あまり褒めた人ではなさそうですね。町の人々はこの口八丁手八丁にのせられて、ぞろぞろとやって来た。これはすごい実行力ですね。

³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。³³弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。³⁴イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」(ヨハネ4・25〜34)

こういふところがイエスのイエスらしいところです。大体、サマリアの女に「水を飲ませてくれ」と言われて問答しているうちに、もう水のこととはどこかへ行っちゃったでしょ。女は水がめを置いて向こうへ行っちゃいました。だから、水も飲んでない。おなかもへっているはずです。弟子た

ちが食物を買いに行った。やっと買って戻ったら、

「私にはお前たちの知らない食物があるんだよ」

と言っているわけです。それは何か。

「御心を行うこと、これが私の食物である」

と。やはり、イエスという方は時々、弟子たちが面食らうことを仰る。もうマリアさんもだいたい面食らいました。これはしかたがない。天界から来た人というのは半分地上の生活をしながら半分天の人でしょ。だから、とどころど波長があわない。それで不可思議なことをなさるといふ存在なんです。

こうやって皆さんと一緒にお話をしていますと、本当に楽しいわけですね。大体、キリスト教のお話は、固苦しいお話はダメです、楽しくないと。聖書学者は単なる歴史とか、考古学によればとか、聖書学によればこうであったとか、人としてイエスはこうであったとか。そのようにすべて神話的要素と言いますか、キリストの奇蹟は全部単なる言い伝えであり、単なる物語であると排して、イエスという人はそんな人ではなくて、イエスを丸裸にして、我々と同じ次元にひきずりおろして、これがイエスだと言う。そこに何が浮かび上がるかという、イエスは情け深い人であった、優しい人であった、同情深い人であったとか。そういうふうな人間のレベルにひきずりおろしてしまうんです。

目に見えるイエスはそうかもしれない。目に見えるイエスの奥に、見えない本質がある。その本

質を福音書はいろんな事柄をとおして伝えていっているんです。そこに我々がぶつかって、我々自身がイエスから直接つかんでいただいて、その霊をいただいて、ツウカーの間柄になりますと、そういう偉い先生方や学者の方が言っておられることが実に愚かであるということがわかります。歴史的に考古学的に調べ上げて、「これがイエスだ」と言っても、「ああそうですか、ただそれだけですか」と、これで終りです。

正に弟子たちやいろんな人が驚いたその本質的存在が、これが霊なるイエスなんです。見えるイエスという人の奥に、見えない本当の霊なるキリスト、霊なる人格——霊的人格と言っておきましよう——それが隠されている。それに気がつく人はさいわいです。そのお方が語りかけているんです。

一対一の対話

イエスが十字架上で息を引きとられた。正に死人とられた。しかし、その後には本当の本質が現れてきた。これが復活という甦よみがえりの事態です。これはイエスの隠された本質が露あらかわな姿で現れた必然の姿にすぎないんです。この現れてきたイエスは実に自由自在ですね。エマオで現れるかと思つてまたここに現れる。また次にあそこで現れるというふうにより自由に現れてきた。四十日間、地上で出沒自在です。それから天へ昇つていかれた。

「ボカーンと天を仰いでいるのではないよ、やがておいでになるからね」と天使たちが告げた。実に楽しい話が福音書や使徒行伝なんかに出ています。

ですから、その一つ一つの記事や出来事が、本当であろうが、言い伝えであろうが、そんなことはどうでもいい。

「湖の上を歩いてこられた」

という。はい、それで結構ですと。キリストぐらいの人なら湖の上を歩いてきたって不思議ではない。ところが、それを頭で納得したい方は、

「あれは復活されたキリストが、霊なるキリストが歩いてきたのを、弟子たちは生きておられたキリストにすり替えたんだ」

という説明をする。説明したら納得できるかしらんけれども、私はちつともありがたくない。

弟子たちが湖の上で暴風雨にみまわられて沈みかかって大変なときに、夜明けの4時頃、キリストは波を踏みしめながら近づいてきた。ぽーつと明かりが灯っている。幽霊かと思つたら、キリストは、「私だよ」

と言った。ペテロは喜んで、

「あなたですか、御許に行かしてください」

と言った。

「きたれ！」

と言われたら、ペテロは歩いて行つたと書いてある。ところが、波と風を見て恐れて沈みかかった。

「ペテロよ、なんぞ疑うか」

と言って、つかまえて舟に乗り込んだ。すると嵐は静まったという。実に愉快ではありませんか。私は法律学者として申します。信ずるとおりになるんです(笑)。「信頼の原則」というのがある。所有権のない人から物を買って取っても、その人が所有権者らしくみえていたら、権利を取得するという制度が民法でいくつも用意されている。それは、そこまで信頼するんだから守ってやろうじゃないかというわけです。ましてや、福音書に書いてあるそういういろんな出来事、これを私のようにそのまま受けとると、

「あいつがあそこまで正直に受けとっているんだからそれを担保してやろうじゃないか、恥をかかしてはまずいよ」

と、神さまの方で応援してくださいますよ、本当に。

だから、その福音書に書かれていることが歴史的な事実であろうとなかろうと——いろんな奇蹟の御業がですよ、十字架は本当の事実ですけれども——他の御業が事実であろうとなかろうと、記事に少々の食い違いがあろうと、そんなことはどうでもいい。大事なことはそこをおして語りかけている神の語りかけです。

「お前はこれをいかなるものとして受けとるか」ということ。

「湖の上を歩いてこられた。ああうれしいなあ。私が困っている時にそのように現れてく

ださいよ、私がSOSしたら来てくださいね」

「よし、わかった、つかまえたぞ」

という、そういうドラマとして自分の中に再現してみる。そうすると、キリストは、

「そうだ、そのとおりだ。私はお前にくっついて離れないぞ」

と言ってください。こういう一対一の対話なんですよ。

たまたまサマリアの女とイエスとの一対一の対話がここに成り立っています。弟子たちもいない。弟子たちは、

「なんだこの女は。この女の人と何か会話しているな」

というだけなんだけれども、この女の人にとっては大変な体験をしたんです。それで町中の人を連れてきた。

キリストとじかじかに出会っ

「³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるようにと頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主で

あるとわかったからです。」(ヨハネ4・39〜42)

町中の人がやってきて、何とその後、イエスに留まってほしいと、旅しておられるイエスを引き止めて、二日間イエスにサマリアの町に留まってもらって、ずっと話を聞いた。そしてたくさんの人が信ずるようになった。すごいですね。ユダヤ人からは完全にシャットアウトされて、異邦人扱いにされて、さげすまれていたサマリアの人たちは、自分たちが本当に生まの目でイエスを見、話を聞き——きっかけはサマリアの女ですけれども——今度は自分たちが生まにイエスという方につかり、話を聞き、そして最後に何と言ったか。

「もう、私たちがこの人を信じているのは、あんたが紹介してくれたからではない。あんたが言ったからではない。自分たちがじかじかにこの方から話を聞いて、そして本当にこの方こそ救い主だと信じたからである」

私たちが宣教師から聞いたのではない。どこそこの牧師から聞いたのではない。宣教師や牧師の話ももちろん、きっかけとなっているんですよ。それを言ってくれたから聖書を読み出したりいろいろあったけれども。それがきっかけとなって、今度は自分たちがじかじかに霊なるキリストに、見えないけれども霊なるキリストにぶつかり、その方から声をかけていただき、その方の言葉を魂の糧として食べ飲み、生き生きと生きるようになった。希望が湧いてきた。

そうやって一人ひとり自分の家に祭壇を持つ。といったって何もなくていい。

「あなた方自身が宮である」

と書かれています。パウロの言葉の中に、

「あなた方自身が神の宮である。それだから、あなた方の身体を穢してはならない。あなた方の身体を清いものとしなさい。そこに神さまがお宿りくださる宮だから」

とある。それは個人でもあるし、また同じ信徒の集まり、それも宮です。それが本当のエクレシヤなんです。そこにキリストの霊がとどまっておられる。

霊が止まる存在が霊止

大体、「ひと」というのは——小池辰雄先生が言っておられました——「霊止」、「霊が止まる」と書く。大言海にそのように書いてある。霊が止まる、神霊がとどまる存在、これが「ひと」だということ。ところが、現代は神霊が全部出て行ってしまいました。神霊が全部出て行ってしまって、全く日本の現代の人はこの霊、特に神さまの霊の次元に対して無感覚になりました。けれども、他の霊に對してはわりに、日野原何とかさんなんていうのによく見ていただいたりとか、細木何とかさんに見てもらったりとか、そっちの方は非常に感覚があるんですけれども、本当の神さまに対して心を開こうという点がどうも失せていますね。

昔の人は、霊が止まる、神霊が止まる存在、「万物の霊長」と言った。これが人間の尊厳なんです。それが切れてしまった。それを元へ戻さないといけない。回復しないといけない。それが今、必要

なんです。

私は、あの教育再生——安倍首相が呼びかけて、教育再生会議やなんかをたくさんの人を集めてやりましたね——教育の再生なら、本当に人らしい人に戻る、人らしい人になることだと思えます。まず先生、親、それから社会の大人たちが本当に真の神さまのところへ立ち返ることです。

「自分たちは神を神ともせず、己おのれがまるで偉いように、地球を支配するように、宇宙を支配するように思い上がっていた。大変なまちがいでした」

と。そう言って、大人たちが、先生方が、親たちがみんな自分から本当に生まれ変わる。そこから新しいことが始まる。その姿に子どもたちが心を打たれる。子どもたちはみな「親の背中を見て育つ」と昔から言いました。親自身が、大人が変なことをして、立派な子どもが育つはずがない。

しかし、あの教育再生会議で誰もそれを言わない。「いやスポーツをやりましょう、教師の資格認定をやりましょう」とか、うわべのことばかりやっている。

本当に日本人は昔から非常に信仰深い民だったと思うんです。山には山の神さまがいる。海には海の神さまがいる。山奥深く入っていけば神々しい気持ちになりますよね。伊勢神宮だってそうです。非常に神々しい雰囲気があります。そういうふうにな宗教的な感受性はある。あるんだけれども、

「この宇宙を創りたもうた神？ そんなものはあるものか」
と、これで終りなんです。そうじゃなくて、

「そのお方は本当に人を愛して、我々と神さまとの間を隔てていたものを打ち破るために

御子キリストをつかわした」

という、これが福音でしょ。御子キリストをつかわした。そして、キリストが道となつてくださった。そういうところへなんとか立ち返ってほしいと、こんなふうに私は願っております。

文語訳と新共同訳の聖書

私の話はどこで切れてもよろしい(笑)。皆さんが何かそういう雰囲気を感ずってくださって、
「これは自分も聖書を読もう」
と思ってくださいれば、それで目的は達するんです。

「聖書」というと、私は日頃は文語の新約聖書に親しんでいる。けれども、やはり今は新共同訳というのが一応、日本で共通の聖書とされていますので、今日は新共同訳から引用させていただきます。たしかに新共同訳聖書はいろいろ工夫をこらして親しみやすく書かれているけれども、ところどころやはりもの足りないというか、ちょっとひっかかる場所がある。たとえば、

「私は平安をあなた方にのこしておく」(ヨハネ14・27)

というヨハネ伝の言葉がある。「平安」ということ。ところが、それを「平和」と訳しなおしてしまっている。これがひとつ残念なことです。

小池辰雄先生は、

「平和というのは人と人との関係で、それが安らかである関係を平和といい、神さまと自

分たち人間の縦の関係における安らかさは、平安というんだ。日本には平安神宮というのがあるじゃないか」

と言われた。平安の都という。「平安」という言葉は日本にもずっと親しくしみ込んでいるわけですね。かつての文語訳の聖書は

「平安を与える」

と書いてあります。それから、「助主」^{たすけぬし}「パラクレートス」という。これは「弁護する者」というのが原語ですけども、「弁護者」というとなにか法廷(法定)用語のように聞こえまして、やはり、「助け主」という方が私には慣れ親しんだ言葉だなという気がいたします。

それから、ヨハネ伝の言葉の中で、「私につながっていないさい」というのがある。「つながっている」という、これは葡萄の木と葡萄の枝がつながっているという関係だからそうなんでしょうけれども、文語訳では、

「我に居れ。あなた方が私の中に居るならば、そして私があなたの中に居るならば」(ヨハネ15・4)

という、「居る」という単純な言葉を使っている。それを

「私につながっているならば、私と結ばれているならば」

という、なにかまどろっこしい感じがいたします。ここにいらっしやるご年配の方々には文語も抵抗なくお読みいただける方だと思いますので、新共同訳と文語訳の聖書を照らしあわせながらお読み

いただければいいのではないかなと思います。私もできるだけピュラーな新共同訳を活用したいと思いますが、そんなことをちよつと感じるんですね。特に、詩篇とかは、文語訳はリズムがあります。リズム感という点では文語訳聖書というものはなかなか捨てがたいものがある。そういう感じを受けています。

命懸けで神の言をくらって生きる

私がこういう講演をしたりする。自分は何ものなのかと思う。私にはある種の抵抗が続いてきたという感じがあります。何に抵抗してきたのかというと、分業制度に対する抵抗なんです。世の中はすべて分業ですよ。

分業は結構ですけども、神さまのことまで分業にして、お祈りしたり聖言の研究をするのはある特定集団の方々にまかせて、

「あなた方はせいぜい働きなさい。日曜日にやつてきなさい。いろんな儀式やミサを受ければ、それで充分です」

と。これで果たしていいんだろうかと思う。本来の姿は、人は一人ひとりが命懸けで神の言をくらって生きることです。

皆さん、私たちは娑婆^{しゃば}で生きているときは本当に命懸けでしょ。労働基準法も何もあつたもんじやない。本当に必死になつて働かないと生計を養えない。身体を養えない。それくらい一生懸命に

なる。よい学校に入ろうと思つたら一生懸命に塾に行つたりなんかして、寝るのは4時間だよと言つている人もある。それぐらいこの世のことに關しては命懸けでやる。ところが、神さまのことになる分業だという。「あなた作るひと、わたし食べるひと」と、もし分業したら大変なことですね。やはり、大事なものは一人びとりが自分で摂取する。水、空気、食物、そういったものが身体にとつて必要なように、靈の生命、靈の糧、魂の糧、これは一人びとりが命懸けで求める。それが人間の本来の姿だと思つて下さい。

ところが、その求める求め方が難行苦行の修行を要するようなら、これはもうお断りですということになるけれども、このキリストの福音というのは、さっきのサマリアの女との対話でわかりますように、出会いなんです。出会つてその日のうちに、たった二日でサマリアの町の人たちがみな信じてしまった。しかも、強いられてではない。心から信じたという。そういう世界なんです。

私は、日本の方々は実に心のやわらかな人々だと思えます。そういう方々が本心に聖書に心を開いていただきたい。分業ではなくて、どの職業にたずさわれようと、どの道に進まれようと、スポーツマンであろうが、学者であろうが、芸術家であろうが、どなたであっても、生命の糧は万人に等しく必要です。他人が代わることができない。

法律の方でも「代理」という制度がありまして、これはしかしながら代理できないものがあるんです。婚姻というのは代理できない(笑)。これはやはり当事者同士が共同生活をしないと、代わりにとつていうわけにいかない。運転なら誰か代理できますよ。車を離れたらすぐに駐車違反でつかまっ

て召しあげられるという。この頃は道路交通法が変わつて、そんなことになるから坐つてましようというように代わつてみたりとか。飲み屋に行つて飲んだら、代わりに私が運転しますよと、代行というのがあつた。ああいうのは他人ができませんけれども。この自分が生命を得るということ、自分が生きるということ、これは誰も代われない。各人が命懸けでやるべきことなんです。

しかも、キリストは、

「誰でも無条件だよ」

と言つてくださる。まず、「無条件だよ」と言われたら、

「そんなものはバカバカしい」

と思つてみんな相手にしない。「百万円積み、一億円積み」と言つたら、命懸けで積むんですよ。ところが、「無条件だよ」と言つたら、

「いいや、また今度」

と言う。これが日本人というか、人間性なんです。

でも、皆さん、空気はいつもただで吸つていてはありませんか。寝ている時だつて空気は吸つていらつしやるではありませんか。しかも、空気は自分でつかめない。空気が皆さんを包んで、皆さんの身体の中にしみ込んで、そして皆さんの血を清めていく。お水もそうです。その他本当に大事なものは無条件です。山の中へ行けば、水はまだ只でいただけです。無条件に必要なものは備えられている。肉体的な絶対必要なものと、それから、靈なる靈止としての絶対必要なもの。この

二つを同時に摂取する。これが私は人間だと思っんです。

「全人」という言葉があります。分業ではなくて、すべてのことを全部やるという。レオナルド・ダ・ビンチか何か知りませんが、そういうのは私は思っています。それぞれ天賦天職というのがありますから。学者は学者らしく、お医者さんはお医者さんらしくという、それぞれの道において一生懸命になさると同時に、人という面においては職業の区別なく、主婦であろうが、高齢の方であろうが、どなたもみな、人であるかぎりたえず必要なものを求め、他人に代わってもらわないという、その生き方をしみこませていただきたい。そのために私は学者だけでも、やはりこの聖書にくいっこうと思っただんです。

キリストによって新しい生命をいただいた

私は24歳のときに人生に生き詰まり、悩みの中でキリストという方を教えてもらった。それから50年になります。小池辰雄先生にそれから3年後にお会いすることができました。先生の書かれた著作とかお話とか、そんなものを一生懸命に吸収して、そして、どんなに苦しいときでも集会はやめないということを貫きました。40歳のときから家庭集会を始めました。そして、今も本当に小人数ですけれども、日曜毎に集まっております。月一回は東京へ来て、新宿集会の方々と一緒にお祈りをするという機会をいただいている。

はつきり申しまして、私は、職業人として、これをやるのは本当に自分としては大変でした。法律の本を書かねばならない。集中してこもってやりたい。しかしながら、こっち(キリスト)の道がある。この二つの、本当に二足草鞋わらじで自分は全うできるのかなと、何度にもなにかある種の壁を感じて、ひるみそうになったことがあった。それでも、私はそれを貫こうとした。

それはなぜかというと、24歳で私の命は一旦終わったと思っただんです。地上の命は24歳で終わって、キリストによって新しい生命をいただいた。そのいただいた生命というのはキリストに献げた生命であって、学問しようが何をしようが、それはキリストの御意みこころにかなうならばそれしようという、キリストの御意ならばという、それがいつも付いているんですね。その中で、御意にかなうならばこれこれしようということでありましたので、本を書くにしても何にしても、それが常にあるわけです。

ですから、私は決めたんです。量を減らそうと。人が5冊本を書くなら、私は1冊でいいと。しかし、そのかわり1冊に全魂をこめて祈りをもって書こう。人が1年で書くならば、10年かかってもいいと。そう思っって、『債権総論』に打ち込んだんです。

私はものすごく忙しい。しかし、私は普通の職業の方々とは違う立場にあるんだから、それは言い訳にならない。出版社には、「すまんね、いつまでもすまんね」と言っって、いつも謝りながら、「原稿は、待っってください、ちょっと待っってください」と、今でもそうです。謝りながらですけれども、しかしながら、私はそれしかない。それで二足草鞋わらじがいつのまにか一つになってきた。そんなに苦しくなくなっってきたんです。

こうやって皆さんにお話するときでも、そんなに私はめちゃくちゃ準備なんかしません。日ごろ思っていることを、少しこんなことも話したいということをもメモ程度にちよつと書く程度で、もう自分の中から溢れ出るものを皆さんにお話すれば、それで充分ではないか。私の中でキリストが働いて告白してくだされば、それで充分ではないかと思つています。キリストは、

「お前ではないよ。私がお前の中で、言うべきことをちゃんと言わせるから心配するな」

と。なにかそんなふうな、ふてぶてしさと申しましようか、開き直りというか、それが出てきたんです。それが出てきて、日曜日でもお話しますと、聞いている人がみな楽しいと言いついてくれた。それまでは、なにか窮屈で、聞いている方もなにか肩が凝るというか、そういうことだったようなんですけれども、最近では、なにかみんな楽しいと言つてくれた。それから、授業だって、楽しいというふうになってくれた。やはり、それはまあ歳も、年季が入っているからなんでしょうけれどもね。

与えたくて仕方がないお方

そういうことで、私の小さな抵抗は、分業ではないということ。本当に一人びとりが、どの職業の人も命懸けで神さまのことを求めてほしい。それは人としての道である。キリスト道という、道なんです。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

と言われた。人としての道。人として生きるということとは万人共通である。しかも、決して難しいことではない。私は苦勞してこういうところへ来ましたけれども。今日も、

「人が苦勞したものをあなた方は刈り取るだけだ」

という言葉が出てきましたが、そのようにキリストは向こうから無条件に与えたくて与えたくて仕方がない。そういうお方であるということを知つてほしいんです。これが教会へ行きますと、なにか窮屈な感じを受ける。

「あれをしてはいけません。これはしてはいけません。お葬式ではこういうふうには振る舞わないといけません」

なんて。厳しい派になりますと、

「お焼香なんかするのははいけません。偶像礼拝ですから、写真の前に礼拝するのははいけません」

と、とにかくうるさいんですよ。それで、私はもうどこにも属しません。在野の人です。こうなれば、誰も私を責めることはできませんから。神さまだけです、責めたいと思えばお責めになりますし。しかし、キリストはそんなことは仰らない。

「お前を使いたくて仕方がない。お前をそう簡単に死なすわけにいかない」と、きつと思つておられると思う。だから、私は告白しつづけます。

とにかく、そういうあらゆる束縛から解き放つて、本当の自由、何ものにも縛られない本当の自由、

それをキリストはくださった。それは神さまに仕える自由なんです。御意みこころの中に生きる自由なんです。そういったことを私は本当に皆さまに知っていただきたいと思つて、こんなことをやっているわけなんです。

本当の健やかな生き方

戦後の、特に大学紛争後、いろんな大学改革がいろいろありまして、新しい学部は何をつくったかというところ、国際何々学部とか、なんでも「国際」をあたりに付けた。その次に何が出てきたか。総合人間学部です。「総合人間」、つまり全人です。ねらいはいいですよ。しかし、やっていることは何かというと、本当に大事なことはやってませんね。総合人間をちっとも求めていないですよ。組織的に何か総合のようなふりをしてますけれども、本当に人間を全人たらしめるもの、そこへは来ない。ということはやはり、神さまの領域というのは人が手でふれることができない。客観化できないものですから、誰かが「これだよ。さあどうぞ」と言つて渡すわけにいかないものなんです。生命というものはそういうものでしょ。「生命をそこに見せろ」と言つたつて無理でしょ、自然の生命だつて。その本当の生命は学問の及ばないところですよ。

だから、どんな賢い方々にもやはり、神さまの世界は聖にしておかすべからざるものです。それは向こうから光がくる、啓示がくる。それをただ受けとる。その中に生きる。そういう関係であつてほしいんです。しかし、そこにはちゃんとロゴスがあります。変な宗教がいつばいあるけれども、

それを見分ける直感を我々は与えられている。我々の常識に、「これは変だな」と思うものはやはり変ですよ。だから、皆さん、私を変だと思われたら、変なんですけれども。全然思われなくても、信じておりますのでね(笑)。たとえば、動物なんかがしつぽを振つて近づいていく人は悪い人ではないと私は思う。犬が横を向くような人は警戒しないといけないと思ひますよ(笑)。やはり、直感的に悟るんだと思う。我々人間も直感的に、「これはあぶない。これは怪しい。これはいかがわしい」とか、見分ける力があると思う。

キリスト教の中で気をつけなければいけないのは、奇蹟とかいうものに対する対し方です。キリストみたいにもすごい癒いよしの御業みわざが起こります。だから、癒しということは御業ではあるけれども、やたらと癒し自体を求めれば、それはダメです。本ものの人の祈りによつていつのまにか周りの人が健やかになつていたという。これならいいんですよ。でも、癒し自体を求めて集まってくると、ろくなことがない。また、ただ頭でつかちになつて、理屈だけを言つて知識だけになつても、これはダメです。そのへんが難しいところですね。

それはやはり、皆さん、年季をつんでいただいて、健やかな生き方をなさってください。私は本当にキリストによつて肉体的には健やかにしていただいたと思つています。キリストによつて私はすべてのことでやる気が出てくる。疲れても必ずまた回復力が与えられるというか、なにか内的なものが湧いてくるような感じがするんです。

もちろん、私は「祈りだけで生きている」なんていうような人間ではありません。疲れたときは

酒も飲みますしね。仕事で疲れたら、走りに行つてリフレッシュしたりとか、そういう自然としたの生き方をしている。しかしながら、一番根底で私を生き生きとさせてくれるのは、やはりキリストというお方がいらつしやつて、その方が、

「お前のことは全部私が引き受けた」と言つてくださるからです。

キリストに出会つた人々

その消息をずつと語り伝えてくれているのが実は、ヨハネ伝の13章からなんです。そこへ入りたんですが、その前にちよつとヨハネ伝の前の方を申し上げておきます。

ヨハネ伝第1章に総論がある。

「初めに言ありき」

から始まる総論があります。これはヨハネ伝全体の入口であり締めくくり、アルファでありオメガです。これは素晴らしいところです。そこに、

「律法はモーセを通して与えられたけれども、恩恵と真理はイエス・キリストを通してやつてきた。イエス・キリストという方は神の独り子、懐にいだかれてはお方、

その方だけが神をあらわした」(ヨハネ・17)

というように書いてある。

それから、おもしろいことは、まず出会いがあります。ナタナエルというのがイエスに出会う出会い方、これは1章の後半にあります。ピリポがキリストに出会つてついでに行く。今度はナタナエルをつかまえて、

「ナタナエル、私は素晴らしい人に出会つた。イエスという方はメシアだよ」と言う。そうしたら、ナタナエルは何と言つたかというのと、

「ナザレからろくな者は出やしないよ」

と言います。私でいうなら、

「河内の八尾からろくな者は出やしない」

と言うのと一緒です(笑)。そしたら、イエスは、

「あれこそ本当のイスラエル人だ。正直ものだ」

と言つて、ナタナエルに会つたときに、

「ピリポがお前を呼ぶ前に、あなたはあの無花果の木の下にいたね」

と仰つた。はるかかなたです。でも、それでナタナエルはびっくりしてしまつた。

「あなたは預言者です!」
と言つた。

「ナタナエル、お前は無花果の木の下にいたと言つただけでびっくりしたけれども、やがて私の上に天使たちが上り下りするのを見ることになるよ」

と言われる場面が1章に出てきます。

それから今度は、3章にいけますと、ニコデモというイスラエルの学者が夜こっそりイエスのところへやって来る。敬意を表して、

「イエスキさま、あなたのなさっている御業みわざは素晴らしい。神さまがご一緒でなければ、こんなことはとてもできっこありません」

と、教えを乞うた。その時、イエスは、

「人は水と霊とによって生まれなければいけない。人は新たに生まれなければ、神の国に入ることはできない」

と仰った。

「肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である」

ということニコデモにいきなりポーンと仰るんです。そしたら、ニコデモはうろたえまして、

「歳としをとってからお母さんのおなかの中にもう一度入るんですか。新しく生まれるとはどういうことですか」

と聞く。即ち、ニコデモにとってはこの地上のことしか頭にないわけですね。イスラエルの教師でありながら、天上のことはわかっていない。それで、キリストはいきなりそれを仰った。それで彼はうろたえるんです。

「人は水と霊とによって生まれなければならない。肉から生まれた者は肉であり、霊から

生まれる者は霊である。私が、新しく生まれなければならないと言ったからとて、驚くにおよばない。風は思いのままに吹いている。どこから来てどこへ行くかわからない。そのように霊から生まれる、上から生まれる、神さまによって生み出されるというのはそういうことだ」

と。手をつかむこともできない。肉眼で確かめることもできない。しかし、確かに生まれるという事実。これがなければ人は本当の人ではない、ということを仰ったのがニコデモとの対話です。相手は学者ですね。

そしてその次に現れたのが、このサマリアの女なんです。だから、この出会いを見てますと、ナタナエル、それからこのニコデモ、そしてサマリアの女と、このように話が展開していく。そういう見方をなさっても、とてもおもしろいと思う。

ヨハネ伝12章の36節あたりからから見えていきますと、これはもう本当にイエスの十字架架が近いというぎりぎりのところで展開してくる物語です。イエスはいろんなことをなさるけれども、結局、ユダヤの人たちは信じない。そこでイザヤの言葉がここに引用されている。

「³³……主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか。主の御腕は、だれに示されましたか。……神は彼らの目を見えなくさせ、その心をかたくなにされた。」

というイザヤの言葉が引かれています。

⁴¹イザヤは、イエスの栄光を見たので、このように言い、イエスについて語ったので

ある。

と。イザヤはイエスのことを語った預言者ですね。44節に、

⁴⁴ イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。⁴⁵ わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。⁴⁶ わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た。⁴⁷ わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。⁴⁸ わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。⁴⁹ なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。⁵⁰ 父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」(ヨハネ12・38〜50)

ここにもよく、このイエスのお言葉というものがどういう性質の言葉かということが出ています。「自分から語っていない。これはすべて父が語れと仰ったことをそのままお伝えしているだけ」

と。イエスは父から遣わされてやってきた。父のことを

「私をお遣わしになった方」と呼んでおられます。そういうことがここでわかります。

弟子の足を洗う

それから今度は、有名な弟子の足を洗われたという場面が出てまいります。13章です。

「さて、¹ 逾越祭^{すきこし}の前^{まえ}のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時^{とき}が来たことを悟り、

地上のイエスがまた天界へ戻って行かれるという、その時がいよいよ来たということを悟って、

世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。² 夕食のときであった。既に

悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。

³ イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、⁴ 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

この3節に、

「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたことを悟り」

とあります。これは非常に重いことなんです。イエスというお方は、「これはいやです」と言う権威があるお方です。「いやです」と言えば断れる。けれども、それをお断りにならなかった。なぜ、断

られるか。これから向かうところは十字架なんです。

十字架というのは罰なんです。何の罰か。神を拒む者、神さまに背く者、悪事を働いている者、いわゆるこの世の、神に逆らう者たちに対する審判、それが十字架なんです。それをイエスが断れば、審判は我々にもろに臨む。いつか知りません。いつか知りませんが臨む。少なくとも、私たちにとっては生命への道は断たれてしまう。ところが、イエスが十字架におつきくださると、それによって我々の受くべき審判を全部一身にひつかぶってくださる。そのぎりぎりのところにイエスは立たされておられる。すべてをイエスの手にお委ねになっているということを悟られるわけです。自分は神から出てまた神に帰る。その時が来ているということを知っておられる。こういう事態なんです。そして今度は、すつくと立ち上がって、弟子たちの足を洗おうとされた。

「なぜ、そういうことをしているのか、それは今はわからないであろう」と仰る。

それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいるのでしたか」と言った。

足を洗うというのは奴隷の仕事だった。それを「主」「先生」と呼んでいるそのお方が自ら洗いたもろということ、ペテロは驚いたわけです。

イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたにはわかるまいが、後で、わ

かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言いつつ、

ペテロが、「そんなもったいないことを、私は弟子としてお受けするわけにまいりません」と。ペテロは正義感に燃えますから、先生思いですから、そう言った。ところが、

イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

「お前とはこうして三年間一緒に暮らしてきた親しい間柄だ。お前は一番弟子だ。しかし、もし今ここで私がお前の足を洗わなかったら、もうお前とは絶縁だ」

と。足を洗うということは全身を洗うことを指していた。

「私がお前を洗う、それでお前は清まる。私が十字架でお前を洗わなければ、お前とは関わりがなくなってしまう」

ところが、ペテロはそんなことを聞いたものですから、

「そう仰るんだったら、足どころか全身を洗ってくださいよ」

とまで言い出した。

そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いものだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清い。だが、皆が清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切るうとしている者が

だれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

¹²さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまつと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことがわかるか。¹³あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。¹⁴ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならぬ。¹⁵わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(ヨハネ13・1～15)

つまり、あなた方も互いに仕え合う者になれと。お互いに足を洗い合う。一番汚いところをお掃除するという、そういう仕事をしなさいと、それをここで仰っている。

イエスの弟子であるならば

ずっと読んでいきますとわかりますように、イエスが去られたあと、弟子たちが残ります。人々の目に映るのは、あれはイエスの弟子だということだけがわかつている。その正体は何だろうか。本当に愛がみなぎっている。互いに足を洗い合っているという姿——なにも現実には足を洗わなくても——本当に彼らは仕え合っている。誰も自分が偉そうにする者はいない。本当にそこに愛のひとつの共同体ができあがっている。それによって、

「ああ、これこそイエスの弟子だということがわかる。そのために今、私はこのような模範を示したんだ」ということを仰るわけですね。そして、31節へ飛びます。

³¹さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。³²神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。」

「人の子」というのはイエスがご自分のことを呼ばれるときに、「人の子」という言葉を使っておられる。そして、少し飛びまして、34節、

³⁴あなたがたに新しい掟おきてをお与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(ヨハネ13・31～35)

世間の人というのは結局、見えるところでしか判断できません。キリスト教会の内実がどんなものであるか、それはそのキリスト教会の方々自身の生活ぶりを見て、「これなら信頼できる」とか、「これはダメだ」とか、そういう判断しかできないわけです。私はきつとここでイエスが仰ったことは、「私があなた方を愛したように、あなた方も本当に互いに愛し合うならば、それによって

あれはイエスの弟子だということを世間の人々はきつと認めてくれるにちがいない」と。そういう心で仰ったと思います。15章のほうに行きますと、

「人その友のためにその生命を捨てる。これより大いなる愛はない」とまで仰っている。愛ということをものすごく重んじられた。

わたしの内におられる父

それから14章にまいります。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。

これから場所の用意しに行く。まるで天国に住宅を見つけに行くような、そういうお話なんです。

行つてあなたがたのために場所を用意したら、戻つて来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちにはわかりません。どうして、その道を知ることができませんようか。」イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわた

しを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。『フィリポが』主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言つと、イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしがわかつていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言つのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行つておられるのである。

言葉が父の御業であるというわけですね。

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言つのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによつて信じなさい。はつきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行つ業を行い、また、もっと大きな業を行つようになる。わたしが父のもとへ行くからである。わたしの名によつて願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によつて栄光をお受けになる。わたしの名によつて何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」(ヨハネ14:1-14)

と。こういう約束をなされます。

愛によって結ばれている関係

それから次に、「聖霊を与える約束」というところにまいります。

¹⁵「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟おきてを守る。これは愛の掟です。」「互いに愛し合いなさい」というのを守る。

¹⁶わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。¹⁷この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知らずともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。

共におり内にいる。やはり、内にいてくださらなければ。外に捜すのではない。あなたの内にはいっしやるお方、内住のキリストです。

¹⁸わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。¹⁹しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。²⁰かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることが、あなたがたにわかる。²¹わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、

その人にわたし自身を現す。」

こういう内在関係、内住関係、愛によって結ばれている関係、これを約束なさいました。そして、

「わたしの言葉の中にとどまっていなさい。言葉の中にとどまっているなら、その言葉と一緒にわたしはいるんだから」

と。言葉と霊は一つなんです。

「わが語りし言ことばは霊なり、生命いのちなり」

という言葉が6章に出てくるけれども、キリストの言というのは単なる言語ではない。言は生命なんです。ヨハネ伝の第1章に、

「この言に生命があつた」

とあります。そういう言は生命をもつ。キリストの語られた言葉というのはそれだけの内実を持っています。

²³イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む。²⁴わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものでなく、わたしをお遣わしになった父のものである。

と。繰り返すこういうことを言っておられます。

²⁵わたしは、あなたがたといたとき、「これらのことを話した。²⁶しかし、弁護士、す

「なわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。²⁷わたしは、平和(平安)をあなたがたに残し、わたしの平和(平安)を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。²⁸『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。²⁹事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。³⁰もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼はわたしをどつすることもできない。³¹わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよつ。」(ヨハネ14・15〜31)

ここで一旦終わっているんですけども、また話が續くかたちになっています。

まことのぶどうの木

次は、「イエスはまことのぶどうの木」というところで、ここもとても大事なことが書かれていますので、要点を見ていきます。15章です。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。²わたしにつながって

いながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れなさる。³わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。⁴わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。⁵わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。⁶わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。⁷あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。⁸あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。⁹父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。¹⁰わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。」(ヨハネ15・1〜10)

これは有名な「ぶどうの木とぶどうの枝」のお話です。ぶどうの枝というのは確かにぶどうの木

としつかりつながつていなければ、切り離されたら枯れてしまいます。この私もイエスというお方と一つであるから生き生きしているけれども、この方から離れたら自分の中に生命はないんです。私のこの右腕は私の体の一部だから何でもできますけれども、これが切り捨てられたら単なる物体になってしまいます。そして腐ってしまいます。そのように、クリスチャンとは何か。

「キリストなしでは何もできない無能力者」

ということですよ。これをよく覚えておいてください(笑)。キリスト者と何か。キリストなしには何もできない無能力者。けれども、キリストがいてくださるなら、何でもできる。キリストがいらっしゃれば何でもできる。キリストがなさるから。自分の業わざではない。

ゼロになれない人間

つまり、キリスト者とは何か。自分自身はもう何でもない、何ものでもない、ナッシング、ゼロです。ゼロにしていた。ゼロになれば、神さまが充滿する。ところが、人間はゼロになれないんです。無心になる、悟りをひらこう、と思っても、ムラムラと何か湧いてくる。断食しておなかへった。ご馳走が目につかぶとかね(笑)。当然でしょ、生命体というのは。生命を守るためには当然でしょ。

それはまあ体の問題ですけれども、その他、人格というものは己を立てたいんです。これを「肉」と言います。生まれながらの人はみなプライドがあります。「私は」と思っている。それを侮辱され

ると、もう我慢できない。復讐しようとか。これが人間性なんですよ、本当のところ。

「右の頬ほおを打たれたら、左の頬を向けよ」

なんて、そんなバカなことは人間性に反するんです。だから、あの「山上の垂訓」はみな嫌いなんですね。「右の頬を打たれたら、左の頬を向けよ」とか、

「敵のために祈れ」

とか、そんな弱虫じゃないぞと、みんなは言う。けれども、キリストは本当に強いお方です。というのは、キリストの右の頬を打って左の頬を叩いたら、その人の手はしびれますよ。それはそうです。日蓮だつてそうだったそうですね。日蓮を斬ろうとしたら、その人の腕がしびれて斬れなかったという逸話が残っている。やはり、本当の霊的な存在者、神の霊が充滿している人を斬ろうと思ったら大変ですよ。これは自分のほうがやられます。けれども、このイエスという方は御意ごいに従って自分を献げた。十字架の上で献げた。だから、凄いことなんです。

人間というのは自分に誇りがある。プライドがある。自分をサムシングにしたい。自分を立派にしたい。それは人として当然の欲求なんです。けれども、それは人の世界での話なんです。こと神さまの前にはイエスという方は本当にぶつつぶれていた。イエスという方はゼロでした。神がすべてで、「父よ」と呼んだ。

「自分からはなにもしない、何もできない。すべて父なる神がせよと仰ることをする。語れと仰ることを語る。私は自分では無責任だ」

と。無能力者であり、無責任者が、あんなに素晴らしいことをなされた。ところが、我々はそれができない。それは「我」といやつがじゃまをします。「業」といやつがじゃまをします。それを「肉」というんです。生まれながらの人間です。ニコデモに仰った、

「肉から生まれたものは肉である。上から生まれなくてはならない。新しい誕生をしなけれ
ばならない」

と。それをこの「肉」というのが妨げている。その我々のどうしようもない「肉」、自我を立てるといふ本性、これは修行ではどうにもならないと私は思いますよ。多分、法然とか親鸞なんかは本當に修行なさったと思う。最後は弥陀の本願にすがられた。光ある方が現れた。それにすがった。そのように自分自身で自分を解決できないというのが人間だと思っんです。

我々が受くべき業に対する審判

それをキリストは、

「そうだよ、その通りだよ。私が来たのは世を審くためではない。世を救うためにやって来た。自分はそのために生命を捨てる」

と。十字架の上で生命を捨てる。それは我々が受くべき業に対する審判です。我々の存在そのものが実は神に逆らうという、残念ながらそういう本質なんです。これは認めたくないけれども仕方がない。しかし、それをキリストは我々の責任になさらなかった。

「私は彼らを担いあげる。私は黙って十字架につく」

と。そして、敵対する者どもに十字架の上から、

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分でやっていることがわからないでいるからです」

と。そういつて、執り成しをされた。こういう姿に私はもう本當に頭を下げる。ユダヤ人が何かと、そういうことではない。これは神の子、神の人ですよ。たまたまユダヤ人の中から生まれたお方だけれども、これは本當の人らしい人です。涙があり、悲しみを知り、痛みを知り、実に愛そのものである方。その方が宗教的な理由で迫害された。神の御意を百%に行おうとされた方を人々は迫害した。しかも、宗家が迫害した。そして、ピラトの許しを得て、十字架につけて殺してしまった。それをキリストは、

「それを全部、私は担う」

と仰った。

「彼らを赦してやってください。彼らは自分で自分のやっている事がわからないからです」

と言われた。

あの弟子となったパウロもそうなんです。ユダヤ教のチャンピオンです。

「律法の点については落ち度がない」

と、胸を張っていた。それがキリスト教徒を迫害しに、わざわざ大祭司から添え文をもらって、殺害の意気はずませてダマスコへと向かって行った。その白昼にキリストが現れた。その光にぶつ

倒された。

「サウロ(パウロ)、サウロ、なんぞ我を迫害するか!」

という声が響いてきた。パウロはぶつ倒されて、起き上がったけれども、目が見えない。ものが言えない。そして、手を引かれて行って、独り静かに祈っていた。そうすると、アナニヤという人のところにキリストが現れて、

「アナニヤよ、サウロというのがあそこで祈っている。まっすぐな道という通りの家にいるから、お前がそこに行行って、サウロのために祈ってやってほしい。彼は今祈っているから」

と。アナニヤは、

「いや、とんでもない。彼は恐ろしいやつですよ」

「いやいや。そうではない。彼は本当に改心して神の使い、キリストの使いとなるから、お前は行ってやってほしい」

と。それで、アナニヤはサウロの所へ行って、手を置いて、

「兄弟サウロよ、お前にダマスコへの途上で現れたイエスというお方が私にお告げになった。手を按おいてやれと」

そして、手を按おいて祈ったら、目が開け、目から鱗うろこのようなものが落ちた。三日間、パウロは飲まず食わず、そういう生活だったんです。それは食べられなかったでしょうよ。自分が信じてきたことが根本的に否定されたんですから。しかも、人ではない。白昼に光が現れて、

「あなたは誰ですか」

「お前が迫害するイエスである」

と。つまり、弟子たちに対する迫害は私に対する迫害であると言って、ぶつ倒した。そして、彼はひっくり返った。

そのパウロが命懸けで今度は、小アジア半島の人々にキリストを証言して行ったわけです。ペテロはエルサレムで教団をつくりました。パウロは異邦人伝道をやった。

そういうことで、初代というものがつくられていったんです。もう、この程度でやめますけれども、私はこういうペテロあるいはヨハネそれからパウロ、そういう者たちは第一期生だと思う。私たちは第何期生か知らないけれども、同質なんです。同窓生なんです。

毎日読む聖書

だから、弟子たちに語られた言葉を私に語られた言葉として受けとる。あなたに語られた言葉として受けとる。

「この言葉、いただき!」

と、いいとこ取りでも結構ですよ。とにかく、好きな言葉をたくさんもらおう。それを豊かな糧かてにする。そうしていますと、今度は聖書を読むのが非常に慕あこわしくなってくるんです。聖書を読んでもない、なにかもの足りない。なにか遠くなったような気がする。それで、私は遠くなってほしくないから、

一生懸命に毎日、毎日、読みます。自分は文語の聖書ですけれども。もう色塗りにされてしまった聖書です。それとこれからは、皆さんに約束しましたので、新共同訳も読みます。それを照らし合わせてながら読みます。本当に、

「わが言は靈なり、生命なり」

と、これで生きるんです。

「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つ一つの言で生きる」

という。その言は本当なんです。キリストは、生命の危機の中でサタンに仰ったわけです。この世にサタンという悪霊がいるので、悪霊が皆さんを惑わして、できるだけ神の言が入らないようにする。これがいなければいいけれどもね。人間は性善説でいいけれども。この悪霊というやつが人間をとつかまえて、できるだけ神さまから退けて悪いことをさせようとする。これをやっつけないといけない。

クリスチャンになられたら、毎日毎日お祈りしてください。悪霊どもがキリストから奪い返そうとしますから。足をすくわれないように。そのためには、聖言を食べることです。それから毎日、

「主キリストさま、ありがとうございます。今日一日、どうぞお守りください」

という「主の祈り」があります。

「試みにあわせないので、悪しきものからお守りください」

と。みんなこれは本当ですから。

そういうふうには、一つ一つを自分の生活の中に取り入れて、自分のひとつの生活を上げていく。そして今度は、困っている方々に、

「ちょっと。いらつしゃい、いらつしゃい。ここには素晴らしい温泉が湧いているのよ」

「どうだい？」

なんていうわけです。

「生命の水を与える」

というのは、キリストご自身のことです。キリストは、

「私自身をやるよ。そしたら、あなたは自分で変わるよ。あなた自身が泉だよ。人々を潤

していくよ」

と。ああ、ありがたいですね。本当にそれは素晴らしいですよ。これはもう、病める人であろうが、健康な人であろうが、関係ありません。寝たきりでも、微笑みで人を生かします。お金があるなしではありません。本当にその人の人柄そのもの、その人の存在そのものが光を放つ。そういうふうにはキリストがしてしまわれる。キリストの姿があなたの姿に変わるんです。それがキリストの思召し召しです。思召しは必ず成るんです。

キリストによって人間が救われていくこと

神の義とは何か。神の義というのは、キリストによって人間が救われていくこと。これが神の義

なんです。ルターはそれに目覚めました。

「神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」

とローマ書に書いてあります。神の義というのは審く義ではない。救う義である。

「神の御意は、すべて私を信する者が一人も滅びないで永遠の生命を得る、これである」
と。ヨハネ伝に何度も出てきます。

だから、神さまは生命を与えたくてしようがない。そのためにキリストを遣わした。人々はキリストを殺した。けれども、キリストは逆にその十字架の死をもって死そのものを滅ぼした。罪そのものを滅ぼした。罪の力を滅ぼした。そして、生命を与える。一人びとりに霊を与える。そして、たくさんのキリストをつくりだす。キリストの霊をもらった者はキリスト者といえます。「キリストのもの」ということです。私は、「キリスト教徒」なんていう言い方は嫌いです。キリスト信徒、あるいはキリスト者、キリストと一緒に生きる者、キリストと一緒に走る者(笑)。キリストと一緒に息している者。それでいいんですよ。民族の違い、宗教の違い、そんなものを越えた本当の天空に光輝く、その広大無辺なる世界に私たちを羽ばたかせてくださる。それがキリストというお方だということなのです。

「ご自分のお家の宗教を大事になさってください。ぶっこわさなくていい。キリストはそれらを含みながらそれに尊びながら、それ全体を包んで、大空の中で光輝いてくださる、そういう光なんです、生命なんです。人を生かしてください。そういうお方が皆さんの中に宿って、くらいいついてく

ださったら、凄いいことになりますよ。来年集まったら、

「ここは光輝いて、もう電気はいらない」

なんてなことになってほしいなあと思います(笑)。

祈り

では、短くお祈りいたします。

主イエス・キリストさま。今日はこうして、晴れた大空のもと、この素晴らしい法曹会館に皆さま方を呼び集めくださいます。この昼のひととき、時のたつのを忘れて、あなたが歩んでくださったあの世界、ガリラヤのほとり、大自然の中、そこで聖言を聞くように、あなたのお話を聞かせていただきました。サマリアの女とのあの出会いの場面、本当に慕わしくございます。ちょうどあの皇居の周りの緑したたる芝生、松の木、そして噴水、すべてがなにかガリラヤのほとりの大自然のように思えてなりませんでした。あなたは至るところにご自身を現してください。真心から「主よ！」と呼びまわれば、

「我なり、懼るな。心安かれ」

と、あなたの方から駆け寄ってきてくださるお方でございます。

我々はどんなに強そうにみえましても、実は弱いものでございます。行き詰まるものでございます。人に語れないことをかかえてしまうものでございます。しかし、あなたはすべてをご存じます。ど

んなことも、

「わかつているよ、わかつているよ」

と言って、私たちの中に入ってください、そばにいてください、

「大丈夫だからね、大丈夫だからね」

と励ましてくださるお方でございます。そういう消息を今日ここに告白させていただきました。どうぞ、ここにお集まりくださった方々、お一人お一人それぞれに、ご自分の生活体験に照らし合わせて、またご自分のお育ちになった境遇に照らし合わせて、それぞれにそれを生かし、活用し、ご自分の主イエス・キリストとの偕なる生活を築きあげてくださるよう^{こいねが}に希い奉ります。

こうしてご一緒にお話を聞くことができましたことを心から感謝し、御名^{ごいねが}をたたえつつ、皆さまのお祈りとあわせ、主イエス・キリストの尊き御名^{ごいねが}によって、今、御前^{ごいねが}に献げ奉ります。アーメン。

(『エン・キリスト』誌第60号2007年10月に掲載)